

## 村上春樹と「脳の多様性」

当事者批評（逆病跡学）と健跡学を实践する

横道 誠

Haruki Murakami and Neurodiversity:  
Practicing *Tojishha-hihyo* (Reversed Pathography) and Salutography

Makoto Yokomichi

### Abstract

Immediately after his debut, Haruki Murakami would often be discussed as autistic. However, as Murakami gradually expanded his artistic endeavors, it became clear that his personality did not fit into the image of autism at that time, and eventually, this trend ended. Later, autism was expanded into the concept of autism spectrum disorder with diverse phenotypes, and in light of this clinical trial, Murakami's personality can be considered to fall in the gray area of this spectrum. This study approaches the enigmatic writer Murakami by implementing a new experimental method of pathography called *Tojishha-hihyo* (reversed pathography) and salutography.

Today, neurodevelopmental disorders, including autism spectrum disorders, are being reinterpreted as neurodiversity, an expression of the diversity of humanity. This paper looks for this diversity in Murakami. However, it should be noted that this work is not an attempt to diagnose the novelist from a pathographical perspective. The author of the paper has himself been diagnosed with an autism spectrum disorder and writes this essay as an expression of secret solidarity.

### はじめに

本稿では、村上春樹を精神医学の知見を活用しながら考察するが、それはある種の「文化」を理解することを目的としている。既存の精神医学に対して、部分的ながら批判的に向きあい、精神疾患を人類の可能性として理解しなおしていく。具体的には、村上春樹を「自閉スペクトラム症グレーゾーン」として解釈した上で、それを「脳の多様性」として位置づけていきたい。

その際、病跡学に似た「当事者批評」の手法を導入する。病跡学では、精神科医が作品や生活史にもとづいて創作者に精神疾患の診断を与える。これに対して、当事者批評では当事者（患者）が、作品や生活史にもとづいて創作者に自分と同質の精神疾患、あるいはその傾向を感じとり、連帯感

を告白する。

また病跡学の分野で注目されている健跡学（サルトグラフィー）の考え方も活用する。創作者の病跡に注目する病跡学（パトグラフィー）とは逆に、健跡学では創作者の健康生成（サルトジェネシス）に注目する。

以上の性質から、本稿を「ポスト病跡学」を遠望するものとして位置づけることができる。

## 1 村上春樹と精神医学

最初期の村上春樹は、村上龍との対談で精神分析への反感を口にしたことがあった。

フロイトというのが僕はすごく嫌いなんですけどね、精神分析というのがものすごく嫌いな。ノックもしないで部屋に入ってきて冷蔵庫開けて帰っていきって感じがしてね。帰っちゃってから、おいおい、あいついったいなんだ、ということになる。(村上 / 村上 1981: 98)

村上の発言は、精神分析によって、自分の作品がこれ以上なく的確に解釈されてしまうかもしれない、という不安を背景にしているのかもしれないが、ここではもっと単純に、安易な擬似科学的分析によって、自身の作品の読み方の可能性が粗雑に荒らされることに嫌悪感があったのだと受けとっておこう。

村上の謎めいた作品は、作者の精神の奥襲に迫りたいという思いを読者に抱かせる。村上作品は、村上自身が、フロイトとは異なる流儀で、自身を精神分析した結果のように見えるからだ。ということは、村上のフロイトに対する忌避感、村上自身が精神分析とは別の方法で、人間の精神の秘密に迫りたいと思う願望の現れなのかもしれない。

この考え方が正しいならば、村上の作品に精神疾患が描かれつつも、それらが既成の精神医学の枠組みには回収されないように配慮されていることは、不思議ではない。村上は、精神疾患に人間存在の驚くべき多様性を見る精神病理学者たちと、ひそかに立場を共有している。

『ノルウェイの森』を例に出そう。岩波明は、この作品について述べる。

小説のヒロインである直子は、二十歳で統合失調症と考えられる精神疾患を発症する。[...] この小説が描いているのは、「美しい狂気」である。あるいは、実在はしない、フィクションの中だけに存在している「ロマンチックな精神病」と言い換えてもよいかもしれない。(岩波 2013: 13)

村上は、作中で直子の病名を伏せている。統合失調症（作中の時間および作品が発表された当時は「精神分裂病」）を思わせる彼女の病態が描かれつつ、直子は精神医学の枠組みに回収されていない。

短編「トニー滝谷」の改稿過程を見ると、村上が精神疾患に関わる表現に対して慎重さを深める過程が浮かびあがる。この作品が当初『文藝春秋』に掲載された際、トニー滝谷の妻は、精神医学の枠組みにほとんど収められてしまっていた。

買うのに忙しくて、買った服を着る暇もないのだ。これは一種の精神の病と言っていいのではないのかと彼は思った。(村上 1990: 368)

「精神の病と言っていいのではないか」という慎重な言い回しながら、トニー滝谷の妻は、精神医学に回収されている。同作が『村上春樹全作品』に収録されたときも、「精神の病」という表現は残された。

服を買うのに忙しくて、着る暇もないくらいなのだ。これは精神の病とっていいのではないだろうかと思つた。もしそうだとしたら、どこかで彼女に歯止めをかけなくてはならない。(村上 1991b: 240)

ところが、同作が改めて短編集『レキシントンの幽霊』に再録された際、事態は一変する。

いくら何でも多すぎる。どこかで歯止めをかけなくてはならない。(村上 1996: 144)

村上はトニー滝谷の妻に「精神の病」の可能性を示唆するのをやめたのだ。この『レキシントンの幽霊』の別の箇所では、彼女の「精神の病」は「薬物中毒」と具体的に表現されていたのだが、これも上の「精神の病」と同様の経過を辿って、消滅した。

『文藝春秋』版では――

彼女はそれを（それはまるで薬物中毒のようなものなのだと彼女は言った）なんとか治癒すると言つた。(村上 1990: 368)

『村上春樹全作品』版では――

彼女はそれを（それはまるで薬物中毒のようなものなのだと彼女は言った）なんとか治癒すると言つた。(村上 1991b: 240)

だが『レキシントンの幽霊』版では――

なんとかそこから抜け出してみると彼女は約束した。こんなことを続けていたら今に家が洋服でいっぱいになってしまうもの。(村上 1996b: 145)

トニー滝谷の妻は、こうして「精神の病と言っていいのではないのか」、「薬物中毒のようなもの」といった言説からも解放されていったのだ。

だが、村上の精神医学に対する慎重さは、この『トニー滝谷』の改稿が起こった1990年代に、複雑に動揺していたように思われる。というのも、村上は河合隼雄との出会いを経て、自分の作品がユングの思想によって読みとくことが可能だと、明言はしないままに、ほとんど同意してしまうからだ。2015年に刊行された『村上さんのところ』で、村上は書いている。

僕は意図してユング的な著作、あるいは解析的な著作は読まないようにしています。でもユング的な考え方とは、通底するところは少なくないと思います。それは優れたユング研究家である河合隼雄さんとお話をしていて、強く感じたことでした。話をしていて、いろんなことがすすつと通じていく感覚がありました。だからこそ僕としては、そういう著作を意識して読まないようにしているということになるかもしれません。何度も繰り返し言っていることですが、小説家の役目は物語を語ることであって、それを解析することにはありませんから。(村上 2015a: 2015-02-13)

村上は、ユングに距離を置いていると語り、小説家の役割は解析（分析、解釈とも言い換えられるだろう）ではないと述べてつも、自分の作品がユングの思想と「通底するところは少なくない」と認めてしまっている。

さて、しかしながら村上作品を精神医学に照らして考えるとき、ユングの精神分析とは別の方向から、村上の精神性をあざやかに浮き彫りにしてくれる知見がある。それは発達障害に属する自閉スペクトラム症（ASD）に関する知見だ。これについて、以下で考察していこう。

## 2 発達障害とは何か

まず発達障害に関する基本事項を確認しておこう。

第一に発達障害の医学的な位置づけの問題だ。発達障害という語感から、生育過程で受けた虐待、ネグレクトなどの精神的影響や本人の努力不足から発育が不健全となり、障害化すると考えられがちだが、この捉え方は誤っている。発達障害は先天的に脳神経の形成が標準とは異なることによって起こり、養育・教育過程の如何を問わずに発生し、病気とは異なって投薬や外科手術による治療法は存在しない。現在の精神医学では「神経発達症」または「神経発達症群」が正式名称とされている。

日本では、2005年に発達障害者支援法が施行され、以来急速に発達障害についての社会的認知が

進んだ。加えて、アメリカでは 2013 年に新しい診断マニュアル『精神疾患の診断・統計マニュアル』(DSM-5) が発刊され、自閉症の従来さまざまなサブタイプ(カナー型自閉症、アスペルガー障害、高機能自閉症、広汎性発達障害など)が「自閉スペクトラム症」へと統合された。発達障害(神経発達症)の全体像は、つぎのように整理されている。

神経発達症 / 神経発達障害群

知的能力障害群

知的能力障害(知的発達症 / 知的発達障害)

全般的発達遅延

コミュニケーション症群 / コミュニケーション障害

言語症 / 言語障害

語音症 / 語音障害

小児期発症流暢症(吃音) / 小児期発症流暢障害(吃音)

社会的(語用論的)コミュニケーション症 /

社会的(語用論的)コミュニケーション障害

自閉スペクトラム症 / 自閉スペクトラム障害

自閉スペクトラム症 / 自閉スペクトラム障害

注意欠如・多動症 / 注意欠如・多動性障害

注意欠如・多動症 / 注意欠如・多動性障害

他の特定される注意欠如・多動症 / 他の特定される注意欠如・多動性障害

限局性学習症 / 限局性学習障害

運動症群 / 運動障害群

発達性協調運動症 / 発達性協調運動障害

常同運動症 / 常同運動障害

チック症群 / チック障害群

(APA 2014: 31-85)

ここからわかるとおり、知的障害は発達障害の下位カテゴリーに位置づけられている。自閉スペクトラム症のほかの発達障害には、注意欠如・多動症(ADHD)、限局性学習症(SLD)、発達性強調運動症(DCD)、チック症群などがある。ちなみにDSM-5のほかのページを見ると、発達障害は各種の精神疾患(鬱病、双極症、統合失調症、パーソナリティ障害、心的外傷後ストレス障害など)と同位カテゴリーとして扱われている。

日本の医学界や医療診断の現場もこの見解に従っているのだが、行政のレベルでは、齟齬が生じる。というのも各種の発達障害者には精神保健福祉手帳が、知的障害には療育手帳が交付されるため、知的障害者は発達障害と別のカテゴリーと見なされている。そして、発達障害者に交付される

精神保健福祉手帳は、各種の精神障害者にも交付されてきたものなのだ。医療の分野と行政の分野とで、発達障害の位置づけが食いちがっている。

第二に、そもそも障害とは何かという問題がある。障害という問題について考える場合、医学モデルと社会モデルの差異を念頭に置く必要があることを強調しておきたい。医学モデルとは、障害の責任を当事者に見るもので、発達障害者を障害者に行っている責任は、当事者の脳にあると考える。他方、社会モデルとは、障害の責任を周囲の環境に見るもので、発達障害者を障害者たらしめているのは、特殊な脳を持って生まれた当事者を生きづらいままに放置する社会の至らなさに見る。現在の国際的な障害理解は、両方の掛け算が採用されているのだが、特に社会モデルは日本で十分に認知されていないため、さらに理解が進むことが望ましい。社会の発展と整備が進むことで、身体的気質に特徴のある人が生きづらくなくなれば、彼らは障害者ではなくなるからだ。たとえば、眼鏡やコンタクトレンズがない時代では、極度の近視者は障害者ということになるが、眼鏡やコンタクトレンズで視力が回復できる時代では、彼らは健常者ということになる。

第三に、発達障害に関して「脳の多様性」（ニューロダイバーシティ）という見解が広がっていることを指定しておきたい。この「脳の多様性」の考え方では、発達障害者とは、人間の脳の認知特性が少数派に属する人たちを指し（ニューロマイノリティ）、発達障害がない「定型発達者」とは、人間の脳の認知特性が多数派に属する人たちを指す（ニューロマジョリティ）と見なされる。この考え方が広まり、発達障害者が社会的障壁を感じずに生きられるようになるならば、彼らは「障害者」の桎梏から解放されるだろう。

本稿は以下で村上春樹の作品から、村上の自閉スペクトラム症的特性を指摘するが、それは村上を精神障害者のカテゴリーに入れようとするためではなく、ニューロマイノリティとして肯定的に理解し、その可能性を強調したいからだ。

### 3 先行する議論について

『風の歌を聴け』に「僕」の少年時代に関する記述がある。

小さいころ、僕はひどく無口な少年だった。両親は心配して、僕を知り合いの精神科医の家に連れていった。(村上 1979: 30-31)

週に一度、日曜日の午後、僕は電車とバスを乗り継いで医者家に通い、コーヒー・ロールやアップルパイやパンケーキや蜜のついたクロワッサンを食べながら治療を続けた。(村上 1979: 33)

これらの記述に依拠して、三浦雅士は批評「村上春樹とこの時代の倫理」で、『風の歌を聴け』を「自閉症の話」（三浦 1981: 211）と名づけた。

医者と幼い患者との対話は微笑ましい。だが、この微笑ましい対話の背後には、自分の気持を他者に伝えることができず、また他者の気持を汲みとることができないという絶望的な状況が横たわっている」 (: 212)

村上龍と松本健一の対談で、おそらく三浦のこの議論を意識しながら、松本は新たな作品『1973年のピンボール』について考察した。

六〇年代末から七〇年代にかけて出てきた自己を押し出していくというやり方、私はこれなんだ、という形で打ち出されてくる“私、というのが、過去にあったものと自分とは違うんだ、という形で出てくる“私、ではなくなっている。それが極端になると、始めから外を拒絶してしまう、他者をきっかけとする自己発見がないんだな。一種、自閉症的な“私、になってしまうわけだ。で、さきほどの村上春樹さんの『1973年のピンボール』でも、あそこにコミュニケーションがないというのはね、主人公と同棲する双子の女の子が出てくるんだけど、それじゃその子は本当に性的な意味で女の子か？ 主人公と別人格の他人か？ というと、そうではなくて透明人間なんです。主人公との距離感が透明なんです。主人公がその女の子と接触することによって、違う自己、次の自己を作りあげていく、そういう関係がそこにはなくて、始めから拒絶し、拒絶されている関係として彼女らは登場する。“もの、なんだな。(村上 / 松本 1982: 48)

川本三郎も、批評「『自閉の時代』の作家たち」で、この「村上春樹=自閉症」論を引きつぐ。

村上春樹の「風の歌を聴け」の主人公はグレン・グールドのレコードを好んでいたがあれは同じ「自閉症」どうしの連帯感だったのかもしれない。(川本 1982: 455)

『風の歌を聴け』では、たしかにグレン・グールドが話題になるが、ほかの音楽家も話題になるため、グールドとのみ結びつけるのは牽強附会かもしれない。だが、筆者自身の見解を書いてよければ、たしかにグールドにも自閉スペクトラム症があっただろうと推測している。いずれにせよ川本は、この「自閉的個人」が「近代日本」よりも未来の「二〇〇一年宇宙」に、つまりスタンリー・キューブリックの『2001年宇宙の旅』を思わせるような未来的な超世界な結ばれていると主張する。

自閉の時代といういわば超近代は、「近代的個人」の確立が可能か否かといった問題すらもまたたくまに影を薄くするほどに進行し、いまや「近代的個人」とはまったく次元の違う「自閉的個人」を出現させてしまったとっていい。この「自閉的個人」にとっては「近代日本」というかつての多くの誠実な文学者を悩ませた過去との連続性よりもむしろ、「二〇〇一年宇宙」

という「わけのわからない、宇宙との連続性のほうがはるかに濃密なものとして感じられるのである。」(：456)

デビュー当時の村上を高く評価していた川本らしく、彼は村上に「自閉症」を見ながらも、「自閉的個人」が「わけのわからない、宇宙との連続性」を実現している点に、新しい文学作品の可能性を見ている。加藤典洋もまた、三浦、松本、川本の議論に賛同しつつ、批評「自閉と鎖国」で、新作『羊をめぐる冒険』を「一個の自閉の文学」と考える。そして、それはやはり村上の新鮮さに期待してのことだった。

『羊をめぐる冒険』は、一個の自閉の文学として、もはや「鎖国」の文学に「自閉」の文学を否定するだけの理由の失われてきていることを教える。村上の小説は、たしかに時代をとりこもうとして函が歪む、その緊張を伝えており、その書き手としての意欲にぼくは敬意を表したいと思うが、それでも彼の小説が示しているのは、この日本にあって自閉の文学が「鎖国」の環を破るためには、いったい、どれだけの自閉の深さとひろがりが必要か、とすることである。(加藤 1983: 225)

独特の批評精神で評判の高かった加藤らしく、彼は村上を「自閉の深さとひろがり」で持って、日本の文学の「鎖国」ぶりを打倒しうる作家なのだと論じたわけだ。

村上春樹の作品を自閉症的と見なすこれらの議論は、村上が作家としての地歩を固めていく上で、急速に廃れていった。村上が積極的に発表していった陽気なエッセイなどが、彼を通念としての「自閉症」とは相容れないように見えて、彼を自閉症的な作家と見なす立場を崩していくことに寄与したのかもしれない。1986年に刊行された『村上朝日堂の逆襲』で、村上は「村上春樹＝自閉症」論にをささやかに皮肉っている。

もちろん僕は自閉症じゃないから——この前三年ぶりに業界のパーティーに出たら某女性作家に「なんだ、村上さんもパーティーに来るんだ、自閉症じゃないだ」と驚かれたけど——人と一緒に楽しく酒を飲むこともある。しかし回数からすれば一人で飲むことの方が圧倒的に多い。もともとつきあいがそんなにないうえに地方都市に住んでいるせいである。くりかえすように僕はずっと自閉症なんかではない。僕が自閉症だったら、村上龍は自開症である。(村上 / 安西 1986: 137)

自分が「自閉症」だったら、村上龍は「自開症」という皮肉。筆者の見解を書いてよければ、村上龍は自閉スペクトラム症の特性が強い作家、村上龍は自閉スペクトラム症と注意欠如・多動症の特性を併せもった作家ということになるような気がする。

いずれにせよ、1990年に刊行された久居つばきとくわ正人の『象が平原に還った日——キーワードで読む村上春樹』では、かつての「村上春樹＝自閉症論」が嘲笑されるようになった。



「自閉の時代」の文芸評論家たちは、何と「内面」が好きであり、「他者」がすきであり、「困難」が好きであるのだろうか。(くわ / 久居 1991: 226)

さて、これが「村上春樹＝自閉症論」の第一ステージと呼びうるものだ。だが、それから 30 年ほどの時間が過ぎたいま、筆者は「村上春樹＝自閉症論」の第二ステージをやろうとしていることになる。先行する議論として、千野拓政が村上作品の登場人物に「自閉症スペクトラム」(自閉スペクトラム症の別表記)を見てとった 2014 年の論文がある。

わたしは、そのようにして描かれる村上春樹の作品の登場人物の孤独に、ある共通の特徴があるように思う。自閉症スペクトラムと重なる点が多いのだ。／「自閉症」という言葉は精神的な疾患を想起させるかもしれない。しかし、ここでいう自閉症スペクトラムの概念はそうしたものと程遠い。精神科医の本田秀夫によれば、自閉症スペクトラムとは「臨機応変な対人関係が苦手で、自分の関心、やり方、ペースの維持を優先させたいという本能的志向が強いこと」(本田秀夫『自閉症スペクトラム』ソフトバンク新書、2013 年)だという。かつての広汎性発達障害、自閉症、アスペルガー症候群、ADHD などを包摂する新しい概念である。重要なのは、自閉症スペクトラムが、社会生活への適合に難があり、支援の必要な「障害性」の人たちだけでなく、社会生活に大きな支障がなく、支援の必要もない「非障害性」の人たちをも含んでいることだ。こうした人たちは病というより、人と交わるのが苦手な性向の持ち主という方が的を射ているだろう。本田によれば、こうした非障害性の人たちが人口の 10% 近くいるという。(千野 2014: 147)

自閉スペクトラム症の概念は、実際には ADHD を含まない——頻繁に併発するが——点など、基本的な事実の誤りも見られるが、かつての古典的な意味合いでの自閉症や、知的障害を有さない自閉症を意味したアスペルガー症候群などを統合して、自閉スペクトラム症という概念に編成されたことは事実どおりだ。参照されている本田秀夫は、自身が自閉スペクトラム症の特性を持つと公言している精神科医のひとりだ。DSM-5 では、全人口のうち自閉スペクトラム症者は約 1%、注意欠如・多動症者は児童が約 5%、成人が約 2%と説明する (APA:54,60)。日本の文部科学省は、発達障害者の児童の割合を 6.5%程度と発表している (文部科学省 2020)。そして本田は、自閉スペクトラム症者はグレーゾーン——引用文中の言い方では「非障害性」の人たち——を含めて約 1 割に達するという持論を提示している (本田 2013)。

伝統的に「自閉的」と呼称されてきた人々の振る舞い、つまり古典的な意味での自閉症者、知的障害のある自閉症者(カナー型自閉症)そのものではなくとも、それをどこことなく連想させるような「健常者」に属しているように見える人々の振る舞いが、自閉スペクトラム症のグレーゾーンに由来することが明らかになってきた。これが 2010 年代の動向だ。千野は、村上作品の登場人物が自閉スペクトラム症に該当すると推測を述べていた。それでは、村上本人はこの問題とどのように

関わりあっているのだろうか。この問題について考えてみたい。

#### 4 発達障害をめぐる村上の発言

上で見たように、2010年代に発達障害に関する言説は日本で広く一般化していった。そこで、この時期の読者とのやりとりを収録した『村上さんのところ』にも、発達障害についての話題が散見される。多くは発達障害の当事者やその家族が語ったものだ。それらの言説と村上の応答を確認してみよう。

村上さん、こんにちは。私には高校生の息子がいます。小さい時からおしゃべりが遅くて、幼稚園の頃には自閉症ではないかと言われていました。結局、自閉症ではないという診断が出たのですが、今だにスピーキングには問題があります。頭の中で文章を組み立てながら一生懸命外国語を話している、というような感じです。それだけが問題ではないのかもしれませんが、友だちらしい友だちがひとりもいません。気だては非常によく、真面目で朗らかなので、親切にしてくれる子も中にはいるのかもしれないし、ちょっとだけ言葉を交わすぐらいのクラスメートならちらほらいると思います。でも例えば、学校を休んだときにその日の宿題などを聞ける友だちもいないし、放課後ちょっと遊んだり、休みの日に一緒に出かける友だちなどはひとりもいません。私も決して友だちが多い方ではありませんが、それでも学生時代やお勤め時代に得た友だち、母親になってからできたママ友など、その時その時で知り合った人たちと長く細くおつきあいが続いています。なので息子のことを考えると、友だちらしい友だちがただのひとりもないまま思春期を終え、もし大学に行っても同じような状況が続いた場合、いったいどんな大人になってゆくのか、非常に心配でたまりません。本人は一見したところ、友だちがいないことをそれほど気にしているふうではないけれど、でもやはり心の中では寂しく思っているような気がします。ある時期、友だちが全然いなくなっちゃった、ということはたまにあるかもしれませんが、もの心ついてからずっと友だちと呼べる存在のいない人生。村上さんは、それがどんなものか想像できますか？ 私にはできないのです。だからよけい我が子が不憫で、これから先が心配でなりません。（みかんっ娘、女性、47歳、パート主婦）『村上さんのところ』「しゃべるスピードが遅い息子が心配」（村上 2015a: 2015-05）

話題になっている少年は、自閉症かもしれないと疑われ、確定診断が出なかったから、自閉スペクトラム症のグレーゾーンと見ることができただろう。つまり、自閉スペクトラム症の特性を持ちながらも、社会生活の障害が強く形成されなかったために、診断に至らなかったわけだ。このような当事者は、環境のさらなる変化があった場合などに、自閉スペクトラム症として診断されることが多い。十分に予想されることだが、村上は自分自身がこの障害に無関係だという考えを仄めかしながらも、親切に回答する。

あなたのメールからはよくわからないのですが、息子さんは勉強には問題がないのですね？本を読んだり、音楽を聴いたりはなさるのでしょうか？もしそういうことに問題がないのであれば、それほど案じられることはないと思いますよ。自分自身の世界をきちんと持っていれば、なんとでも人生を前に進んでいけるものです。そういうことをもう少し細かく書いていただけたらよかったです。いろいろとご心配だとは思いますが、僕があなたのメールの文面から得た印象では、息子さんはそのまま放っておいて大丈夫だろうという気がします。なんとかなっていくんじゃないかな。優しく見守ってあげてください。（: 2015-05）

「自分自身の世界をきちんと持っていれば、なんとでも人生を前に進んでいけるものです」という村上の回答は、いかにもムラカミエスクな印象がある。かりにこの発言に加えて、「それがうまくいくようにするために、息子さんの環境の調整に心を砕いてあげてください」と言えば、ソーシャルワーカーたちが自閉スペクトラム症児の親に語る言葉と同一になる。おそらく村上自身は、その環境調整を自分なりに必死に進めることによって、自閉スペクトラム症と診断される状況に陥らなかったのではないだろうか。

『村上さんのところ』から、注意欠如・多動症と診断された少女とのやりとりも見てみよう。

理性がつきはじめた頃から、他者と比べて思考が幼いと気付いていました。そして 17 歳になり、診断された結果、ADHD だとわかりました。ネットでは、私達 ADHD はゴミクズだと、生きている価値がないと綴られていることが多々あります。そのネットでの価値観はまったくもって正しいと私は思います。先生ならば、どう思われるのでしょうか……？（村上 2015a: 2015-02-09）

「ゴミクズ」扱いされる障害を診断され、苦しむ彼女に対して、村上はどのように答えるだろうか。

すごく平凡な答えになって申し訳ないのですが、時間をかけてその ADHD とつきあっていくしかないと思います。まわりの協力も必要だし、あなた自身の努力も必要だけど、それはじゅうぶん可能だし、やってみる価値はあると思います。もちろん専門医師の指導も大事です。ネットで何が言われているか知りませんが、そんなことは気にしない方がいいと思いますよ。あなた自身の大事な問題なんだから。そしてそれを乗り越えられたとき、あなたはほかの人よりずっと強い人間になれていると思います。健闘を祈ります。（: 2015-02-09）

村上は「時間をかけてその ADHD とつきあっていくしかないと思います。まわりの協力も必要だし、あなた自身の努力も必要だけど、それはじゅうぶん可能だし、やってみる価値はあると思います」と語るが、これは当事者研究の考え方にほかならない。当事者研究とは、疾患や障害の当事者が、自分自身で、また仲間とともにその当事者の苦勞の構造を考察し、周囲の環境調整の力を借

りて、生きやすい状況を作りだしていく精神療法（心理療法）を指している。村上はおそらくなんの精神疾患も診断されないままに、自分なりの工夫によって、この当事者研究の技法を自前で作りあげていったのではないか。

さらに、限局性学習症を推測させる 18 歳の女子学生の声聞いてみよう。

私はどうも勉強が苦手です。本を読んだり、講義を聞くことは好きなのですが（これらは知的好奇心を満たしてくれるのでむしろ積極的にします）、机にじっと座って勉強をするということがどうしてもできないのです。というか、学校で勉強の方法って習ったのでしょうか？ 勉強の仕方ってなんなのでしょう。何個も連なった問 1、問 2、問 3……を眺めていると、くらくらしてきてつい遊んでしまいます。それで親には怒られます。「何故集中できないのか、なぜ頭が良くないとわかっていながら勉強しないのか」と聞かれるのですが、私には理由が分かりません。ただ、できないのです。でも面白い講義を聞くために大学には行きたいのでいやいや勉強しています（浪人中です）。それで予備校の興味のない科目をさぼって街を散歩したり、宿題を提出しなかったり、勉強せずに本ばかり読んでしまったり、そんなことをしているままでは大学に行ったところで駄目なままだなあ、とは分かってきたのでやっとなんか直す気になってきたのです。勉強ってどうすればできるのでしょうか。（村上 2015a: 2015-04-30）

これに対して村上は自分から発達障害の学習障害（限局性学習症の旧称）について言及する。

僕も勉強ってあまり好きじゃなかったです。つまらないよね。受験勉強ってきらいだったし、実際のところあまりしませんでした。英文和訳ばかりやってました（昔からそれだけは好きだった）。それから世の中には「学習障害」というものがあります。英語で言うと、Learning Disabilities、略して LD です。知的能力はまったく劣っていないんだけど、システムティックな勉強に向いていない。そういう能力が欠如あるいは不足している。そういう傾向のある人に「勉強しろ」というのは、ほとんど拷問に等しいことです。僕にも少しくらいそういう傾向があったかも。好きなことならいくらでもできるんだけど、いやなことにはぜんぜん関心が向かない。そういう傾向は今でもぜんぜん変わっていません。きみはどうなんだろう？ 何か好きな勉強はありますか？

『1Q84』の「ふかえり」には読字障害があったが、それは限局性学習症の一症例に属する。同作の執筆以前に、村上には限局性学習症に対して関心を深め、調べものをした時期があったのだろう。村上は限局性学習症が「僕にも少しくらいそういう傾向があったかも」と述べている。しかし、それに続いて「好きなことならいくらでもできるんだけど、いやなことにはぜんぜん関心が向かない。そういう傾向は今でもぜんぜん変わっていません」と語る。じつは、このような極端な「こだわり」は自閉スペクトラム症者の特徴のひとつだ。なお限局性学習症と自閉スペクトラム症は併発しやすいことも知られている（APA 2014: 73）。

## 5 診断基準

ここで、自閉スペクトラム症の診断基準を DSM-5 から引用しておこう。

A：社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害（以下の3点で示される）

- ①社会的・情緒的な相互関係の障害。
- ②他者との交流に用いられる非言語的コミュニケーションの障害。
- ③年齢相応の対人関係性の発達や維持の障害。

B：限定された反復する様式の行動、興味、活動（以下の2点以上の特徴で示される）

- ①常同的で反復的な運動動作や物体の使用、あるいは話し方。
- ②同一性へのこだわり、日常動作への融通の効かない執着、  
言語・非言語上の儀式的な行動パターン。
- ③集中度・焦点づけが異常に強く限定的であり、固定された興味がある。
- ④感覚入力に対する感性あるいは鈍感性、あるいは感覚に関する環境に対する普通以上の関心。

C：症状は発達早期の段階で必ず出現するが、後になって明らかになるものもある。

D：症状は社会や職業その他の重要な機能に重大な障害を引き起こしている。

「A」は、かつてローナ・ウィングが自閉症児の「三つ組の障害」として提示した、社会的相互作用の障害、コミュニケーションの障害、想像力の障害（Wing 1981）を現代的に洗練させたものと言える。「B」は、反復性に関するもので、「こだわり」（に見えるもの）と言いかえることができる。自閉スペクトラム症者は、発達障害のない「定型発達者」に比べて自我が不安定な傾向がある。そのため、「同一性保持」への志向が強く、同じようなことやものに強く執着しているという印象を与える。この「反復性」ないし「こだわり」には、一般に「感覚過敏」や「感覚鈍麻」と呼ばれるものも含まれる。

「C」は自閉スペクトラム症に見えても、先天的な性質を持っていないからではないということの意味する。後天的に突如として自閉スペクトラム症に似た特性が現れた場合は、別の精神疾患と見なされる。「D」は、前述した「社会モデル」を意味している。社会生活で深刻な障壁が発生しなければ、自閉スペクトラム症の特性が濃厚でも、自閉スペクトラム症者として診断されない。社会的障壁と感ぜられるものは、乳児の頃から現れる場合も、就学時に現れる場合も、成人してから現れる場合もある。

以下で筆者は、この診断基準を踏まえつつさまざまな村上作品を読解し、村上の自閉スペクトラム症的特性を確認していく。だが、これは「はじめに」に書いたように病跡学とは異なって、当事

者研究として示される。筆者は精神医学の専門家ではなく、その意味で筆者の精神医学に関する知識はそれ自体で保証されない。とはいえ筆者には、自閉スペクトラム症の当事者として発達障害者のための自助グループを主催してきたという背景がある。京都の公民館での開催とオンライン会議の両方を通じて、これまでに自閉スペクトラム症を診断された数百人の当事者と対話を続けてきた。その「体験的知識」によって専門的知識の不安定さを支え、村上の作品と対話しようとするのだ。

以下の内容は、斎藤環が筆者の『みんな水の中——「発達障害」自助グループの文学研究者はどんな世界に棲んでいるか』に指摘した「当事者批評」(斎藤 2021: 28)を継続的に実践したものだ。

「はじめに」で述べたように、当事者批評では当事者(患者)が、作品や生活史にもとづいて創作者に自分と同質の精神疾患、あるいはその傾向を感じとり、連帯感を告白する。精神科医による診断とは別物として受けとめていただきたい。

## 6 当事者批評の実践(1) ——コミュニケーション

診断基準「A」「B」「C」「D」のうち、自閉スペクトラム症の特性を記述しているのは「A」と「B」だった。まずは「A」の特性、つまりコミュニケーションの特異さと見られるものに注目したい。

### 6-1 ディスココミュニケーション

村上春樹の大きなテーマとは、ディスコミュニケーションだろう。これは自閉スペクトラム症の特性と重なっている。『ねじまき鳥クロニクル』を見てみよう。

僕はガスの火を弱め、居間に行って受話器をとった。新しい仕事の口のことで知人から電話がかかってきたのかもしれないと思ったからだ。

「十分間、時間を欲しいの」、唐突に女が言った。

僕は人の声色の記憶にはかなり自信を持っている。でもそれは知らない声だった。「失礼ですが、どちらにおかけですか?」と僕は礼儀正しくたずねてみた。

「あなたにかけているのよ。十分だけでいいから時間を欲しいの。そうすればお互いよくわかりあうことができるわ」と女は言った。低くやわらかく、とらえどころのない声だ。

「わかりあえる?」

「気持ちだよ」

僕は戸口から首をつきだして台所をのぞいた。スパゲティーの鍋からは白い湯気が立ちのぼり、アバドは『泥棒かささぎ』の指揮をつづけていた。

(村上 1994b: 7-8)

作品冒頭で電話をかけてきて、主人公にテレフォンセックスをしかけるこの謎の女は、物語の後

半に至って主人公の妻だと判明する。このような深刻なディスコミュニケーションは、村上作品の通奏低音と言って良いものだろう。

## 6-2 デタッチメント

診断基準では、自閉スペクトラム症者には「社会的・情緒的な相互関係の障害」があるとされていた。これは初期の村上作品を特徴づける「デタッチメント」に重なる。村上は河合隼雄との対談で語る。

僕が小説家になって最初のうち、デタッチメント的なものに主に目を向けていたのは、単純に「コミュニケーションの不在」みたいな文脈での「コミットメントの不在」を描こうとしていたのではなくて、個人的なデタッチメントの側面をどんどん追求していくことによって、いろんな外部的価値（それは多くの部分で一般的に「小説的価値」と考えられているものでもあったわけだけれど）を取り払って、それでいま自分の立っている場所を、僕なりに明確にしていこうというようなつもりがあったのだという気がします。（河合 / 村上 1996: 13-14）

社会の動向、あるいは周囲の生活環境とうまく歯車が合わず、孤立して生きる主人公たち。それは初期の村上作品を特徴づけているし、初期に限らず、ほとんどの村上作品の主人公にそのような側面が残されている。

## 6-3 シンプル志向

米田衆介は、「アスペルガー障害」の中核的特性として、「注意、興味、関心を向けられる対象が、一度に一つと限られている」というシングルフォーカス特性、「同時的・重層的な思考が苦手、あるいはできない」というシングルレイヤー思考特性、「「白か黒か」のような極端な感じ方や考え方」をするという知覚ハイコントラスト特性の3点を挙げている（2011:64-65）。このような特性から、自閉スペクトラム症者には「シンプル志向」、あるいはミニマリズム的な志向が顕著となる。『職業としての小説家』で、村上はデビュー作『風の歌を聴け』のときから、「おまえの文章は翻訳調だ」と言われたことを記している。

僕がそこで目指したのはむしろ、余分な修飾を排した「ニュートラルな」、動きの良い文体を得ることでした。僕が求めたのは「日本語性を薄めた日本語」の文章を書くことではなく、いわゆる「小説言語」「純文学体制」みたいなものからできるだけ遠ざかったところにある日本語を用いて、自分自身のナチュラルなヴォイスでもって小説を「語る」ことだったのです。そのために

は捨て身になる必要がありました。極言すればそのときの僕にとって、日本語とはただの機能的なツールに過ぎなかったということになるかもしれません。(村上 2015b: 48)

ここでいう村上が言う「余分な修飾を排した「ニュートラルな」、動きの良い文体」はシンプル志向の、ミニマリズム的なものということができる。この文体の基本的性質は一定の変遷を経ながらも、最初期から現在まで守られている。

#### 6-4 ゼロ百思考

シンプル思考は、心理学の世界で「ゼロ 100 思考」や「白黒思考」と呼ばれる極端な価値観と不可分な関係にある。そのような思考は自閉スペクトラム症児に頻繁に見られる(パステル総研 2021)。村上が「100 パーセント」という表現を好むことは、よく知られているだろう。たとえば、初期には「4月のある晴れた朝に 100 パーセントの女の子に出会うことについて」という短編が執筆された。

四月のある晴れた朝、原宿の裏通りで僕は 100 パーセントの女の子とすれ違う。／たいして綺麗な女の子ではない。素敵な服を着ているわけでもない。髪の後ろの方には寝ぐせがついたままだし、歳だっておそらくもう三十に近いはずだ。しかし 50 メートルも先から僕にはちゃんとわかっていた。彼女は僕にとっての 100 パーセントの女の子なのだ。彼女の姿を目にした瞬間から僕の胸は不規則に震え、口の中は砂漠みたいにカラカラに乾いてしまう。(村上 1983: 18)

『ノルウェイの森』は発売された当時、帯に「100 パーセントの恋愛小説」というキャッチコピーが記されていた。これは村上自身が考えたものだった。

「恋愛小説ブーム」があって、僕が『ノルウェイの森』を書いたのではなく、『ノルウェイの森』を書いて、その帯に「これは 100 パーセントの恋愛小説です」と書いた(僕が書きました)だけです。順番からいえば『ノルウェイの森』の方がいわゆるブームとしての恋愛小説より先です。でも「恋愛小説」っていったい何なんでしょうね? 考えてみたら実体ないですよ。帯にはほんとうは「これは 100 パーセントのリアリズム小説です」と書きたかったのだけれど(つまり『羊』や『世界の終わり』とはラインが違いますということです)、そんなことも書くわけにはいかないので、洒落っけで「恋愛小説」という「死語」を引っ張り出してきたわけです。そんなに本が売れて言葉が一人歩きすることになるなんて思わなかった。だからべつにマーケティングしたわけではありません。(村上 2000: 54-55)



村上自身は、読者とのやりとりがよく伝えるとおり、単純に「ゼロ百思考」や「白黒思考」を振りかざす人ではないが、それでも村上の理想主義的な側面は、それらの性質の香りを漂わせている。

## 6-5 独特すぎるユーモアへの感性

コミュニケーションのあり方が非定型的な自閉スペクトラム症者は、ユーモアに関しても非定型的な要素を含みこんでいて、聞き手をギョッとさせることが稀ではない(永瀬 / 田中 2012)。これは村上のユーモアがしばしば見せる異様さに対応している。『ノルウェイの森』で、「僕」と緑の食事場面を見てみよう。

夕方になると彼女は近所に買い物に行って、食事を作ってくれた。僕は台所のテーブルでビールを飲みながら天ぷらを食べ、青豆のごはんを食べた。

「沢山食べていっぱい精液を作るのよ」と緑は言った。「そしたら私がやさしく出してあげるから」

「ありがとう」と僕は礼を言った。

(村上 1987 下 : 211)

なお、自閉症児についての議論で伝統的に「心の理論」が取り沙汰されてきた。自閉症者は他者の心を推測する能力(心の理論)を持たない、というもので、この見解を真に受けると、自閉スペクトラム症者は文学を理解することなど不可能ということになる。だが、「心の理論」をめぐる見解にはさまざまな誤りがある。定型発達児であっても、4歳くらいまでは「心の理論」を持たないし、自閉症児も年齢があがれば(知的障害がなければ)心の理論を身につける。つまり「心の理論」の獲得の可能性は絶対的な問題ではなく相対的な問題にすぎない。

成長後の自閉スペクトラム症者も他者の心を推察することが苦手と言われがちだが、これは認知特性が異なる定型発達者の心を推測することに困難を感じるということであって、同様の感じ方や考え方や経験を共有する自閉スペクトラム症同士は、互いの心を推測することができることが多い。さらに世の中には文学作品を含めてさまざまな創作物があり、それらを読解することによって、自閉スペクトラム症者は定型発達者の心のあり方や動き方を学習することができる。そこで文学作品も独自の仕方からだが、理解することができる。この事実は自閉スペクトラム症者の文学作品読解を調査したラルフ・ジェームズ・サヴァリーズの研究から明らかだ(サヴァリーズ 2021)。自閉症者に対して、伝統的に想像力やコミュニケーションの障害が指摘されてきたが、実際には自閉症者には非定型的な想像力やコミュニケーション様式が備わっていると規定するほうが実情に即している。

以上から、「村上春樹には心の理論があるから自閉スペクトラム症に無関係だ」といった反論は成

立しない。

## 7 当事者批評の実践 (2) ——反復性

続いて診断基準の「B」の特性、つまり「反復性」ないし「こだわり」に注目したい。

### 7-1 凝り性

自閉スペクトラム症者の「こだわり」は「こだわり行動」や「自己刺激行動」と呼ばれるもの以外に、性格上の凝り性となって現れる。村上の作品を読んだものは、その凝りに凝った調子に驚くのではないだろうか。エッセイ集『もし僕らのことばがウイスキーであったなら』を見てみよう。

残念ながら、僕らはことばがことばであり、ことばでしかない世界に住んでいる。僕らはすべてのものごとを、何かべつの素面（しらふ）のものに置き換えて語り、その限定性の中で生きていくしかない。でも例外的に、ほんのわずかな幸福な瞬間に、僕らのことばはほんとうにウイスキーになることがある。そして僕らは——少なくとも僕はということだけれど——いつもそのような瞬間を夢見て生きているのだ。もし僕らのことばがウイスキーであったなら、と。  
(村上 1999b: 11)

「もし僕らのことばがウイスキーであったなら」。ここまで凝った比喩を書く作家も、しかもその比喩を書名に選んでしまう作家も、村上以外には珍しいだろう。

### 7-2 自己流の徹底

自閉スペクトラム症者は「こだわり」によって駆動されるため、自己流を徹底する傾向が強い。日本の発達障害者のあいだで、就労移行支援、就労定着支援、大学生の就職支援、児童の放課後等デイサービスなどを提供する Kaien は有名な企業だ。この企業も成人した自閉スペクトラム症者が「自己流で物事を進めたがる」ことを指摘している (宮尾 2022)。たとえば、短編集『一人称単数』について考えてみよう。この短編集の書名は 1977 年に寺門泰彦訳で出版されたジョン・アップダイクの『一人称単数』を流用したものだ。このような書名の付け方は、大江健三郎の『万延元年のフットボール』をサンプリングした『1973年のピンボール』や、ビートルズの「ノルウェーの森」をサンプリングした『ノルウェーの森』にも現れた自己流を徹底している証拠だ。『一人称単数』に収められた短編「ヤクルト・スワローズ詩集」で、「僕」はかつて『ヤクルト・スワローズ詩集』

を自費出版したことがあると語る。これは虚構だが、1981年出版の『夢で会いましょう』には「ヤクルト・スワローズ詩集より」と書かれた5編の詩が収録されているから、『一人称単数』はそのセルフパロディになっているという「こだわり」の結果で、また架空の詩集で遊ぶのは、『風の歌を聴け』で架空の作家ハートフィールドで遊んだときからの村上の自己流のユーモアだ。

### 7-3 物語の神話的類型

村上さんの多くの長編は、神話的な類型性を示していて、似たようなプロットばかり有していると批判されてきた。ある読者は、村上作品の可読性は、そのことに関係があるのかと村上に問う。

村上さんの小説はほとんど読みました。というより、なぜだか読んでしまうのです。それがとても不思議なのです。村上春樹は現代において神話を紡いでいるのである、と何かで読みましたがそういうことなのでしょう。だから読んでしまうのでしょうか。村上さんの作品については色んな人があーでもないこーでもないと分析しますね。私はそういうのは嫌いです。村上さんもそういう嫌いだと思います。村上さんの作品に出てくるジャズとかクラシックとかオシャレな食べ物のこと、私にはよくわからないのでイメージが湧きにくいこともよくあります。だけど読みます。大切なことが書いてあるんだけど、それがなんなのか、わからないのです。我々は生きていかななくてはならない？ うまく言えないのですが、村上さんの小説を読んだ後は苦しい気持ちになってしまいます。神話に苦しめられていると思えば納得できるような気がするのですが。村上さんは神話を書いているんですか。それともそんなつもりはないのでしょうか。教えてください。(村上 2015a: 2015-02-12)

村上さんはジョーゼフ・キャンベルの比較神話研究を引きあいに出しながら答える。

世界にはいろんな神話がありますが、どこの国の神話にも「共通する部分」がとても多いんです。同じような成り立ちの話がとても多いです。それについてはジョーゼフ・キャンベルという人が『生きるよすがとしての神話』『神話の力』の中で詳しく語っています。なぜ「共通する部分」が多いのか？ それは人というのは、言語や文化の違いを超えて、時間を超えて、意識の底の方でみんなしっかりと同じ水脈に繋がっているからだ、というのがキャンベルの考え方です。無意識下のイメージはだいたいみんな似ているんです。僕が小説を書くときも、そのような無意識下のイメージをできるだけ繋げていきたいという思いがあります。あなたは僕のそのような思いにうまく感応してくださっているのかもしれませんが。だとしたら、僕としても嬉しいです。(：2015-02-12)

「人というのは、言語や文化の違いを超えて、時間を超えて、意識の底の方でみんなしっかりと同

じ水脈に繋がっているからだ、というのがキャンベルの考え方です。無意識下のイメージはだいたいみんな似ているんです。僕が小説を書くときも、そのような無意識下のイメージをできるだけ繋げていきたいという思いがあります」。このように書きながら、村上は明らかに彼が何度も口にしてきた「井戸」や「地下二階」、そしてユングの集合的無意識論を意識していただろう。

#### 7-4 マラソン

自閉スペクトラム症にはしばしば発達性強調運動症(DCD)が併発する。発達性強調運動症とは、体のさまざまな部位を連動的に動かすのが困難で、極端な運動音痴や不器用をしめしめしてしまう発達障害の一種だ。とはいえ、自閉スペクトラム症者が必ずスポーツが不得意というわけではない。特に持久走やマラソンが得意な自閉スペクトラム症は珍しくなく、それは体の部位の単純な反復的使用が自閉スペクトラム症の特性に合っているからだ(宮尾 2020)。多くの読者は、村上がマラソンをする作家の代表だと知っている。マラソンについてのエッセイ『走ることについて語るときに僕の語ること』で書く。

生まれつき才能に恵まれた小説家は、何をしなくても(あるいは何をしても)自由自在に小説を書くことができる。泉から水がこんこんと湧き出すように、文章が自然に湧き出し、作品ができあがっていく。努力をする必要なんてない。そういう人がたまにいる。しかし残念ながら僕はそういうタイプではない。自慢するわけではないが、まわりをどれだけ見わたしても、泉なんて見あたらない。鑿を手にくつこつと岩盤を割り、穴を深くうがっていかないと、創作の水源にたどり着くことができない。小説を書くためには、体力を酷使し、時間と手間をかけなくてはならない。作品を書こうとするたびに、いちいち新たに深い穴をあけていかなくてはならない。(村上 2007: 64-65)

村上は「鑿を手にくつこつと岩盤を割り、穴を深くうがっていかないと、創作の水源にたどり着くことができない。小説を書くためには、体力を酷使し、時間と手間をかけなくてはならない」と語る。その日常を支えるのが、マラソンの習慣だった。

#### 7-5 収集癖

自閉スペクトラム症者の特性として、収集癖が知られている。イギリスの国立自閉症協会(National Autistic Society)のウェブサイトには「自閉症者は、おもちゃ、置き物、モデルカーなどの物体(や物体の一部)、あるいは牛乳瓶のふた、石、靴などのより珍奇な物体にも愛着を示すかもしれません。収集癖もじつによく見られます」(NAS 2020)と記されている。

村上はレコードやTシャツを収集している。かつてのウィスキー遍歴も味覚経験の収集と言える要素を含んでいるだろう。特に熱を入れてきたレコード収集についての見解を聞いてみよう。

レコードを集めるのが趣味で、かれこれ六十年近くせっせとレコード屋に通いつけている。これは趣味というよりは、もう「宿痾」に近いかもしれない。僕はいちおう物書きだが、本にはなぜかそれほどの執着はない。しかしレコードに関しては、認めるのはどうも気恥ずかしいのだが、それなりの執着があるみたいだ。(村上 2021: 10)

収集癖のある人がすべて自閉スペクトラム症というわけではないが、自閉スペクトラム症の特性を持つ人は多くの場合、自分だけの「こだわり」を発揮して何かを集めている。村上もそのひとりという可能性が高い。

#### 7-6 オウム返し

コミュニケーションの問題にもまたがることだが、自閉症者にはオウム返しの特性がある。自閉スペクトラム症児のじつに85%にオウム返しの癖があるという (Schuler / Prizant 1985)。さて、村上作品の登場人物は頻繁にオウム返しで返答する。『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』で、多崎つくるとは恋人の沙羅に高校時代の女友だちのことを話し、沙羅は質問をする。

「それで、あなた自身はどうだったの？　ずっと一緒にいて、シロさんや、クロさんには心を惹かれなかったの？　話を聞いていると、二人ともなかなか魅力的な人たちに思えるけど」

「どちらの女の子も実際に魅力的だったよ。それぞれに。心を惹かれなかったと言ったら嘘になる。でも僕としてはできるだけ彼女たちのことは考えないようにしていた」

「できるだけ？」

「できるだけ」とつくるとは言った。また頬が少し赤らんだような気がした。「どうしても考えなくちゃいけないときは、二人を一組として考えるようにしていた」

沙羅：「二人を一組として？」

(村上 2013: 22)

村上の多くの読者は、村上作品の膨大なオウム返しをムラカミエスクだと感じているはずだが、それは自閉スペクトラム症的なものなのだ。

## 7-7 感覚の解像度の高さ

自閉スペクトラム症には、感覚過敏が付属する。これは中立的な言い方をすれば、多くの自閉スペクトラム症者は、定型発達者よりも感覚の解像度が高いということを意味する。自閉スペクトラム症には感覚鈍麻も顕著だが、これは感覚の解像度が高いために、感覚刺激が定型発達者よりも閾値を超えやすく、感覚鈍麻が発生しているのだと解釈できる。グニラ・ガーランドの『ずっと「普通」になりたかった。』、アクセル・ブラウンズの『鮮やかな影とコウモリ——ある自閉症青年の世界』、拙著の『みんな水の中』や『イスタンブールで青に溺れる——発達障害者の世界周航記』などに、自閉スペクトラム症者の感覚の解像度の高さは記録されている。さて、そのような書物を出版してきた筆者は、村上の感覚のあり方に非常な親近感を覚えている。村上の情景描写はきわめて解像度が高いものだからだ。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を見てみよう。

正面には海が見えた。荷を下ろし終えて吃水線の浮かび上がった古い貨物船も見えた。かもめが白いしみのようにあちこちにとまっていた。ボブ・ディランは『風に吹かれて』を唄っていた。私はその唄を聴きながら、かたつむりや爪切りやすずきのバター・クリーム煮やシェーヴィング・クリームのことを考えてみた。世界はあらゆる形の啓示に充ちているのだ。／初秋の太陽が波に揺られるように細かく海の上に輝いていた。まるで誰かが大きな鏡を粉々に叩き割ってしまったように見える。あまりにも細かく割れてしまったので、それをもとに戻すことはもう誰にもできないのだ。どのような王の軍隊をもってしてもだ。／ボブ・ディランの唄は自動的にレンタ・カー事務所の女の子のことを思いださせた。そうだ、彼女にも祝福を与えねばならない。彼女は私にとっても良い印象を与えてくれたのだ。彼女をリストから外すわけにはいかない。(村上 1985: 612)

知識がなければ、「自閉スペクトラム症」と聞いても、その「自閉」と感覚の解像度の高さが関係するものとは予想できないだろう。だが、感覚の解像度の高さも自閉スペクトラム症的な特性なのだ。

## 8 当事者批評の実践 (3) ——解離

自閉スペクトラム症者はフラッシュバックを起こしやすい。その意味で解離の傾向が備わっていると言える。解離とは、現実に幻想がまじりこむ精神現象のことだ。柴山雅俊は、この解離の傾向が進行した自閉スペクトラム症を「解離型 ASD」と呼んでいる(柴山 2017: 193)。斎藤環は村上に解離があることを示唆したことがあるが(斎藤 2004: 107-124)、筆者は村上がこの「解離型 ASD」だと推測している。

## 8-1 フラッシュバック

自閉スペクトラム症のフラッシュバックについて、杉山登志郎は、「タイムスリップ現象」という名称で説明している。杉山は優れた記憶能力をもつ、知的水準が高い自閉症児に起こると指摘しているが（杉山 2011: 47）、これは成人後も継続する。「感情的な体験が引き金となり、過去の同様の体験が想起される」、「その過去の体験をあたかも現在の、もしくはつい最近の体験であるかのように扱う」と杉山は説明する。村上作品にはこのような「タイムスリップ現象」がよく現れる。たとえば『ねじまき鳥クロニクル』で語られる皮剥ぎや『海辺のカフカ』の猫の惨殺といった凄惨な場面は、ほとんどフラッシュバックと言える。『風の歌を聴け』と『1973年のピンボール』の様式は、カート・ヴォネガットの作風をサンプリングしたものだが、この二作はフラッシュバックを作品化したものと読むことができる。

さらに『風の歌を聴け』にはつぎのような描写がある。

三人目の相手は大学の図書館で知り合った仏文科の女子学生だったが、彼女は翌年の春休みにテニス・コートの脇にあるみずばらしい雑木林の中で首を吊って死んだ。彼女の死体は新学期が始まるまで誰にも気づかれず、まるまる二週間風に吹かれてぶらさがっていた。今では日が暮れると誰もその林には近づかない。（村上 1979: 94）

小島基洋は、この自殺したかつての恋人が初期の村上の最大のテーマだと見なし、上に引用した一節に含まれるモチーフが、複数の初期作品で反復されたことを指摘している（小島 2017: 7-9）。これは、サンプリングにしてアダプテーションでもある運動が村上の創作で起こったと見なすことができる。引用した一節はそれ自体がフラッシュバックになっているし、村上が含まれたモチーフを使って再創作したことも、フラッシュバックに通じる行動だったと言えるのではないか。

## 8-2 あちらの世界とこちらの世界

解離型ASDについて、柴山雅俊は離隔の感覚によって特徴づけられ、人間社会のストレスから逃れて——村上の言葉で言えば「デタッチメント」になるだろう——、「向こう側」の世界、に思いを寄せると説明する（柴山 2017: 198-199）。村上の作品にはそのような「向こう側」の世界が頻出し、登場人物は井戸やエレベーターや非常階段を使って、それらの世界に行く。『1Q84』を見よう。

狂いを生じているのは私ではなく、世界なのだ。（村上 2009: 195）

1Q84年——私はこの新しい世界をそのように呼ぶことにしよう、青豆はそう決めた。／Q

は question mark の Q だ。疑問を背負ったもの。／彼女は歩きながら一人で肯いた。／好もうが好むまいが、私は今この「1Q84年」に身を置いている。(：202)

まったく三〇回目の誕生日をよりによってこんなわけのわからない世界で迎えることになるなんてね、と青豆は思った。そして眉をひそめた。／1Q84年。／それが彼女のいる場所だった。(：204)

村上が好んで作品化してきたふたつの世界のモチーフは、「解離型 ASD」の特性と言えるものなのだ。

### 8-3 イマジナリーフレンドと分身

村上作品には分身が登場する。『風の歌を聴け』が群像新人文芸賞を受賞したときに、吉行淳之介は選評で、すでに「「鼠」という少年は、結局は主人公（作者）の分身であろうが、ほぼ他人として書かれているところにも、その手腕が分る」と見抜いていた（吉行 1979: 119）。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の「私」と「僕」と「僕」の影、『ノルウェイの森』のワタナベトオルと永沢、『ねじまき鳥クロニクル』の岡田亨と綿谷昇、『海辺のカフカ』の田村カフカと「カラスと呼ばれる少年」、『騎士団長殺し』の「私」と「白いスバル・フォレスターの男」のように、村上作品には分身やイマジナリー・フレンドのようなものがよく登場する。

ところで、解離型 ASD には仮面のキャラクター、「イマジナリーコンパニオン」、つまり空想上の同伴者が生まれて、「素顔のない仮面、それに全面的になりきるヴェールを被ったコスプレイヤーのような存在」を体現することが稀ではない（柴山 2017:202-203）。村上も語る。

僕はどうも宿命的に鏡とか双子とかダブルとかにすごく惹かれるみたいである。どうしてかはわからない。(村上 1991a: vii)

「ダブル」とは分身を意味する。村上自身にも「よくわからない」というこの関心は「解離型 ASD」の特性と言えるものなのだ。

ところで、なぜ解離型の自閉スペクトラム症者はイマジナリー・コンパニオンを心に宿しやすいのだろうか。「自閉」しているからと言えばそれまでだが、自我が不安定なために、他者の言動を取りこみやすく、それらが複数の人格のようにして心のなかに棲みつくからだろう。筆者はこの解離性同一性障害（いわゆる多重自覚）に至らない解離を「キマイラ現象」と名づけた（横道 2021: 117-118）。

また、解離型の自閉スペクトラム症者が「分身」に関心を抱きやすいとしたら、それはどのような仕組みによってなのだろう。筆者は、自閉スペクトラム症者の比率に関係があると考え。先に



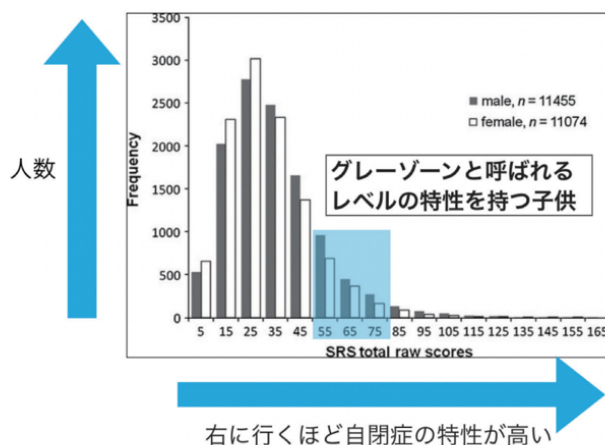
述べたように、自閉スペクトラム症は全人口の1%程度と言われている。学校でいえば、数年に1回程度の割合で同じクラスに自分と同じ自閉スペクトラム症児がいるという計算になる。しかし全人口の1割ほどという「グレーゾーン」を入れれば、10人にひとりくらいだから、毎年同じクラスに2、3人の自閉スペクトラム症グレーゾーン児がいるということになる。そのような「同類」に出会ったときの衝撃が「分身」というモチーフに目覚めさせるのではないか。

なお過去の論文(横道 2018)で村上と比較した大江健三郎の作品にも「分身」が溢れかえっている。おそらく大江も「解離型 ASD」を持ち、村上と大江の類似とはこの特性に由来するのではないかと、と筆者は推測している。

## 9 自閉スペクトラム症グレーゾーンと健跡学

前節までで、村上に自閉スペクトラム症、特に解離型 ASD の特性を推測していく作業を終えた。読者が筆者の「当事者批評」を信頼してくれるならば、村上に自閉スペクトラム症の特性が備わっていることを、理解していただけるのではないだろうか。だが、それでは村上は自閉スペクトラム症者そのものと言えるのだろうか。筆者はそのように言えないと考える。村上は自閉スペクトラム症のグレーゾーンなのだ。

神尾陽子は、日本全国の小中学校通常学級に通う一般児童生徒 22,529 人を対象として、65 項目から成る親評定の質問紙 (Social Responsiveness Scale : 対人応答性尺度) を用いて、対人コミュニケーション症状を中心とする ASD 症状の分布を調査し、結果を 2013 年に報告した。



前ページの図のグラフが示すように、一般児童集団のなかに、横軸に示される ASD の特性 (SRS 得点) は、大多数の ASD の特性をほとんど持たない児童 (定型発達児と考えられる集団) から、ASD 特性を強く有するごく少数の児童 (ASD 診断に合致すると考えられる集団) まで、正規分布

に似た形で分布を示すことが判明したという。その2群を区別する溝のようなものは見られず、グレーゾーンと呼ばれる診断基準には完全に一致しない「診断閾下」の多数の児童が存在することがわかったという（岡 / 神尾 2020: 43-44）。

村上は——推測するしかないが——発達障害の診断を受けたことがないだろう。先に述べたように、診断基準にも明記されていたように、自閉スペクトラム症はその特性が濃厚でも社会生活が阻害されるに至らなければ自閉スペクトラム症者として診断されないから、村上は自閉スペクトラム症のグレーゾーンと考えることができる。それは村上が自身を自閉スペクトラム症者にする環境から逃れられてきたことを意味する。

では、それはどのようにして可能になったのだろうか。自閉スペクトラム症の特性が、診断がおりるほど強くないからという考え方もできるが、このグレーゾーンの問題について、先のグラフは障害の医学モデルにもとづいて示していると考えられるが、これとは別に障害の社会モデルで考えることもできる。先に述べたように、自閉スペクトラム症の診断基準には「社会モデル」が部分的に採用されていて、社会生活で深刻な障壁が発生しなければ、自閉スペクトラム症の特性が濃厚でも、自閉スペクトラム症者として診断されない。つまり、村上は環境の整備によってグレーゾーンでいられると考えることもできるのだ。

「はじめに」で述べたように、病跡学の分野では、従来のように創作者の病跡に注目するのではなく、創作者の「健康生成」に注目する健跡学が注目を集めている。創作者たちは、精神疾患の特性を持ちながらも、創作によって健康を生成し、それで優れた仕事に従事できていたと考えるのだ。

健跡学はレジリエンス、つまり弾力的な回復力に注目や、SOC (sense of coherence)、つまりストレスに対処して主体の首尾一貫性を維持する感覚に注目する。斎藤環は坂口恭平について論じる。

さまざまな天才の生涯を眺めてみれば、そこに見えてくるのは必ずしも「病理」の風景ばかりではない。むしろ印象的なのは、彼らが並外れて過酷な環境下においても素晴らしい創造性を発揮し、あるいは偉業を達成し得たという「強靱さ」の側面ではないだろうか。確かに彼らは、創造行為の中核的動因として、何らかの病理を抱えていたかもしれない。しかしその一方で、きわめて高いレジリエンスを有していた、とも考えられる。中井久夫が病跡学について述べた「不発病の理論」の可能性は、主としてこちらの側にある。本来であれば何らかの精神疾患を発病していたであろう天才が、創造行為に没頭することで発症を免れるという意味からも。

村上の自閉スペクトラム症者でないのは、先にも書いた村上流の当事者研究が関係していると筆者は考える。ひとりで自由気ままに過ごす時間を大事にし、音楽などの趣味に耽り、父権主義的な日本の「文壇」から距離を置き、海外に好んで居住し、マラソンなどによって体を鍛え、創作に没頭する。これを考察することで村上の「健跡学」を構築することができる。創作に関しては、夢の論理が大きく関与しているだろう。村上はインタビューで「作家にとって書くことは、ちょうど、目覚めながら夢見るようなものです。それは論理をいつも介入させられるとはかぎらない、法外な経験なんです。夢見るために毎朝僕は目覚めるのです」と述べたことがあった（村上 2010: 157）。

この「夢見るために毎朝僕は目覚める」ことができたことが、村上を自閉スペクトラム症の特性を濃厚に持ちながら、グレーゾーンに留まることのできた原因ではないか。

ジョナサン・ディルは、村上が生育過程でさまざまな傷つきの体験を抱えていたと論じる。ディルは、父の村上は父の千秋と葛藤を持ち、父権主義的な日本の文壇と対立したことのほかに、『ノルウェイの森』の直子のモデルになったと見られる女性について言及している。村上の結婚から数ヶ月が過ぎた 1972 年 1 月に実家で自殺したという村上の高校の時代の恋人〈K〉が、村上を物語の執筆による治癒へと向かわせたというのだ (Dil 2022: 3-18)。兵庫県立神戸高校で村上の二学年上だった永田實によると、K と村上と同学年でともに新聞委員会に属し、「二人はつきあっているのではないかと噂され」、「二人そろって暗いイメージのカップルだった」という。K は卒業後、国際基督教大学に進学し、一年遅れて村上が早稲田大学に進学したという (浦澄 2000: 187-188)。

これに関する真実を探る能力は筆者にはないが、そのような心をの苦しみは村上の自閉スペクトラム症者としての特性を強化したと推測することはできる。あるいは、それが村上に標準的な自閉スペクトラム症ではなく、解離型 ASD の特性を与えたのではないかと推測することもできる。しかし、いずれにしても村上のレジリエンスと SOC が今後さらに注目されるべきだろう。

## 10 おわりに

本稿では当事者批評と健跡学という、病跡学の新たな潮流に、あるいはむしろ「ポスト病跡学」と呼びうるかもしれない思考方式を導入し、考察した。ニーチェは『曙光』で、「苦悩する者の認識」について語っている。

自身の病苦に長く恐ろしく苛まれ、それでも自分の知性が曇らない病者の状態は、認識にとって無用なものではない。すべての深い孤独や、突然、あらゆる義務や慣習から突然自由が認められたときにもたらされる知的な恩恵は言うまでもないだろう。重度に苦しむ者は、彼の状況からゾッとするような冷たさで事物を見わたす。健康な者が見るときは通常、ものごとはあつとあらゆる欺瞞の魔術のなかを漂っているわけだが、それが重度に苦しむ者にとっては消えてしまうのだ。そう、重度に苦しむ者はみずからの眼前に自分自身を色艶のない姿で提示するのだ。もしこの人が、それまでなんらかの危険な夢見心地のなかで生きていたとしよう。その人をそこから引きさらう方途、そしておそらく唯一の方途とは、苦痛による最高度の覚醒なのだ。(Nietzsche 1988: 104-105)

人生の苦痛度があがれば、覚醒が深くなる可能性も高まる、とニーチェは主張する。そして村上の覚醒度も、まさにそれが理由で深いものになったのだろう。

本稿は「脳の多様性」の理解にも貢献している。筆者は「脳の多様性」が、ひとつの文化現象として考察する価値があると考え。繰り返かえしになるが、自閉スペクトラム症者は全人口の 1%程

度だが、グレーゾーンを含めれば1割近くに達する。自閉スペクトラム症者には独自の認知や認識が備わっていて、それらはこれまでの人類に少数派ならではの刺激を与えてきただろうし、自閉スペクトラム症者が集合して共同体を運営すれば、おそらく新たな文化を生みだしていこう。それは夢物語ではない。なぜなら、俗に「発達界限」と呼ばれるそのような疑似的コミュニティが、すでにSNSを中心に形成されているからだ。

## 文献一覧

- 岩波明『精神科医が読み解く名作の中の病』、新潮社、2013年
- 浦澄彬『村上春樹を歩く——作品の舞台と暴力の影』、彩流社、2000年
- 岡琢哉 / 神尾陽子「2—vi. 心の問題を抱えやすい発達障害」『「こころの健康教室サニタ」心の健康発達・成長支援マニュアル 2020』、2020年（  
[https://sanita-mentale.jp/pdf/support-manual/20200219\\_10\\_support-manual-2-6.pdf](https://sanita-mentale.jp/pdf/support-manual/20200219_10_support-manual-2-6.pdf)）
- ガーランド、グニラ『ずっと「普通」になりたかった。』、ニキ・リンコ（訳）、花風社、2000年
- 加藤典洋「自閉と鎖国——一九八二年の風の歌」、『文藝』1983年2月号、河出書房、212-225ページ
- 河合隼雄 / 村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』岩波書店、1996年
- 川本三郎「「自閉の時代」の作家たち」、『群像』、講談社、1982年5月号、448-456ページ
- 小島基洋『村上春樹と《鎮魂》の詩学——午前8時25分、多くの祭りのために、ユミヨシさんの耳』、青土社、2017年
- サヴァリーズ、ラルフ・ジェームズ『嗅ぐ文学、動く言葉、感じる読書——自閉症者と小説を読む』、岩坂彰（訳）、みすず書房、2021年
- 斎藤環『解離のポップ・スキル』、勁草書房、2004年
- 斎藤環「坂口恭平——健康生成としての創造」、『精神神経学雑誌』122(1)号、日本精神神経学会（編）、2020年、48ページ
- 斎藤環「発達障害当事者の感覚世界」、『日本経済新聞』2021年6月5日（土）朝刊、28面
- 柴山雅俊『解離の舞台——症状構造と治療』、金剛出版、2017年
- 杉山登志郎『杉山登志郎著作集1—自閉症の精神病理と治療』、日本評論社、2011年
- 永瀬開 / 田中真理「ある自閉症スペクトラム障害者におけるユーモア表出の特徴——ユーモア表出時の他者理解の様子から」、『教育ネットワークセンター年報』12号、東北大学大学院教育学研究科（編）、2015年、79-87ページ
- パステル総研「もう困らない！「0か100か思考」の発達障害の子どもとの上手な付き合い方」、パステル総研、2021年9月7日（<https://desc-lab.com/8062/>）
- 久居つばき/くわ正人『象が平原に還った日——キーワードで読む村上春樹』、新潮社、1991年
- ブラウンス、アクセル『鮮やかな影とコウモリ——ある自閉症青年の世界』、浅井晶子（訳）、イン

デックス出版、2005年

本田秀夫『自閉症スペクトラム ——10人に1人が抱える「生きづらさ」の正体』、ソフトバンククリエイティブ、2013年

三浦雅士「村上春樹とこの時代の倫理」、『海』1981年11月号、中央公論社、208-219ページ

宮尾益知（監修）「ASD・ADHD・LD以外の発達障害——発達性協調運動障害 チック障害・トゥレット症候群 緘黙症 言語障害 SLD(限局性学習症)」、2020年11月11日(<https://www.kaien-lab.com/faq/1-faq-developmental-disorders/others/>)

宮尾益知（監修）「大人のASD(自閉症スペクトラム、アスペルガー症候群・広汎性発達障害など)」、2022年 (<https://www.kaien-lab.com/aboutdd/asd/>) ※年号は参照した年。

村上春樹『風の歌を聴け』、講談社、1979年

村上春樹『カンガルー日和』、平凡社、1983年

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』村上春樹、新潮社、1985年、612ページ

村上春樹『ノルウェイの森』全2巻、講談社、1987年

村上春樹「トニー滝谷」、『文藝春秋』1990年6月号、362-373ページ

村上春樹「自作を語る 補足する物語群」、『村上春樹全作品 1979～1989 5(短編集2)』、講談社、1991年(a)

村上春樹『村上春樹全作品 1979～1989 8(短編集3)』、講談社、1991年(b)

村上春樹『ねじまき鳥クロニクル 第1部 泥棒かささぎ編』、新潮社、1994年

村上春樹『レキシントンの幽霊』、文藝春秋、1996年11月(b)

村上春樹『もし僕らのことばがウイスキーであったなら』、村上陽子(写真)、平凡社、1999年

村上春樹『「そうだ、村上さんに聞いてみよう」と世間の人々が村上春樹にとりあえずぶつつける 282の大疑問に果たして村上さんはちゃんと答えられるのか?』、安西水丸(絵)、朝日新聞社、2000年

村上春樹『走ることにについて語るときに僕の語ること』、文藝春秋、2007年

村上春樹『1Q84』BOOK1、新潮社、2009年

村上春樹『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです——村上春樹インタビュー集 1997～2009』、文藝春秋、2010年

村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』、文藝春秋、2013年

村上春樹『村上さんのところ——コンプリート版』(電子書籍)、フジモトマサル(挿画)、新潮社、2015年(a)

村上春樹『職業としての小説家』、スイッチ・パブリッシング、2015年(b)

村上春樹『一人称単数』、文藝春秋、2020年

村上春樹『古くて素敵なクラシック・レコードたち』、文藝春秋、2021年6月

村上龍 / 松本健一「「私」に何ができるか」、『広告批評』1982年3月号、マドラ出版、47-59ページ

- 村上龍 / 村上春樹『ウォーク・ドント・ラン』、講談社、1981 年
- 文部科学省（「特別支援教育 1. はじめに」、2020 年 ([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/to\\_kubetu/001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/to_kubetu/001.htm))
- 横道誠「村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の 3つの論点——7つの翻訳（英訳、フランス語訳、2つの中国語訳、ドイツ語訳、イタリア語訳、スペイン語訳）、ポップカルチャーの変質とセカイ系の現状(あるいは新しい文学史の希求)、大江健三郎の「ファン」としての村上」、『MURAKAMI REVIEW』0号、2018年、1-92 ページ
- 横道誠『みんな水の中——「発達障害」自助グループの文学研究者はどんな世界に棲んでいるか』、医学書院、2021年
- 横道誠『イスタンブールで青に溺れる——発達障害者の世界周航記』、文藝春秋、2022年
- 吉行淳之介「一つの収穫」、『群像』1979年6月号、119 ページ
- 米田衆介『アスペルガーの人はなぜ生きづらいのか？ 大人の発達障害を考える』、講談社、2011年
- American Psychiatric Association（編）『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』、日本精神神経学会（日本語版用語監修）、高橋三郎／大野裕（監訳）、医学書院、2014年 ※典拠表示はAPA
- Dil, Jonathan, *Haruki Murakami and the Search for Self-Therapy: Stories from the Second Basement*. London (Bloomsbury Academic), 2022
- National Autistic Society, “Obsessions and Repetitive Behaviour – A Guide for All Audiences,” National Autistic Society, 12,08.2020
- Nietzsche, Friedrich, *Morgenröte; Idyllen aus Messina; Die fröhliche Wissenschaft*. (Kritische Studienausgabe in 15 Einzelbänden, hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Bd. 3.) 2., durchgesehene Auflage. München; Berlin / New York (dtv / de Gruyter), 1988
- <https://www.autism.org.uk/advice-and-guidance/topics/behaviour/obsessions/all-audiences>)
- ※典拠表示はNAS。
- Schuler, A. L. and Prizant, B., “Echolalia.”, *Communication Problems in Autism*. Ed. by Eric Schopler and Gary B. Mesibov. New York (Plenum), 1985, pp. 163–184
- Wing, Lorna, “Asperger's Syndrome: A Clinical Account,” *Psychological Medicine*. Vol. 11 (1), 1981, pp. 115–129

## 注記

本研究は、JSPS 科研費番号 JP19K00516 の研究成果を含んでいる。

【横道誠（文学・当事者研究）】